

狭山市遺跡調査会報告書 第15集

城ノ越遺跡 第15次調査

—— ガソリンスタンド建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

2005

埼玉県狭山市遺跡調査会

狭山市遺跡調査会報告書 第15集

しろ の こし いせき

城ノ越遺跡 第15次調査

ガソリンスタンド建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005

埼玉県狭山市遺跡調査会

序

狭山市域の遺跡は中央を貫流する入間川の左右両岸に、川に沿う形で所在します。いずれも当時の人々の生活を知る上で、大変貴重なものです。しかし、昭和40年代後半より増加した諸々の開発行為によりこれらの遺跡は破壊の危機にさらされることとなります。狭山市はそれら開発行為によって形としては滅失してしまう埋蔵文化財を事前に発掘調査し、記録・保存を行っています。

この報告書もその記録保存事業の一つの成果を表したものです。

本報告書は平成9年度に実施した調査で、ガソリンスタンド建設に伴って行われたものです。主に奈良・平安時代の住居遺構等が発見され、隣接する同時代の遺跡群と共に、同時代の人々のくらしの一端を明らかにする資料が出土しています。

この成果が当地域の研究と埋蔵文化財に対する理解を深めるとともに、市民の皆様の生涯学習に資するものになれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査においてご理解いただいた早川さと様、献身的に調査に従事し、報告書刊行までご協力いただいた協力員の方々に厚く御礼申し上げます。

平成17年6月

狭山市遺跡調査会
会長 門倉 節明

例 言

1. 本書は狭山市狭山地内所在の城ノ越遺跡第15次調査の報告書である。
2. 本書で報告する発掘調査は分譲住宅建設に伴うもので、狭山市遺跡調査会が発掘調査を実施し、調査費用は早川さと氏が負った。
3. 発掘調査届に対する文化庁の受理番号と調査原因は、以下のとおりである。
平成9年6月27日付、教文第268号 ガソリンスタンド建設
4. 発掘調査期間は、整理・報告書作成期間は、以下のとおりである。
発掘調査：平成9年5月28日～平成9年7月16日
整理・報告書作成：平成16年11月1日～平成17年5月11日
6. 発掘調査は石塚和則が担当した。また、伊倉榮男、久保正雄、坂入しげ子、坂入 誠、指田ツネ、田口文枝、増田富雄、松本八重子、三橋文子、山本とし子が参加した。
8. 図版の作成と出土品の整理は安井智幸が担当した。また、石塚香、今坂優代、岸千代子、瀬戸山真由美、橋本弓子、晝間由美子の補助を受けた。
9. 本書の執筆は安井があたった。
10. 本書の編集は狭山市遺跡調査会が行った。
11. 発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の諸氏並びに諸機関から御教示・御協力を賜った。厚く感謝の意を表する（敬称略、五十音順）。
赤熊浩一 田中広明 富田和夫 中平 薫 柳井章宏 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
埼玉県教育委員会生涯学習部文化財保護課 三芳町歴史民俗資料館

凡 例

1. 遺跡におけるグリッドの設置は、10m×10mの方眼を組み、グリッドの名称は北東杭を基準として、南北方向北から南へ1～、東西方向東から西へA～、と番号をつけている。
2. 挿図の縮尺は以下のとおりである。また、各挿図にスケールを付した。
遺構図：1/60、同炉跡図：1/30、調査区全測図：1/200、遺物実測図：1/3、1/6
3. 遺構断面図の水糸レベルは、海拔高を示す。
4. 遺構の表記記号は以下のとおりである。
住居跡：S J、掘立柱建物跡：S B、柵列痕：S A、溝跡：S D、土壌：S K、集石土壌：S C
5. 遺物観察表の表記は口径、器高、底径はcmを単位とし、()内の数値は推定値・現存値である。色調は部分省略し、青灰・灰白・褐灰・褐・明褐、他とした。胎土は肉眼で観察できるものを示し、焼成は良好・普通・不良の3段階に分けた。残存率は図示した器形に対し、5%単位で示したが、20%以下の場合は「破片」として処理した。
6. 本報告書に掲載した出土品は狭山市教育委員会で保管している。

目次

序	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
図版目次	

調査の概要	1
1 発掘調査に至る経過	1
2 発掘調査の組織	1
3 発掘調査の経過	3
遺跡の立地と環境	4
1 地理的環境	4
2 歴史的環境	4
3 遺跡の概要	7
遺構と遺物	9
1 調査成果の概要	9
2 検出遺構と出土遺物	9
住居跡	9
掘立柱建物跡	17
柵列痕	17
溝跡	19
土壌	19
集石土壌	21
表採遺物	21
まとめ	22

插图目次

第1图	狭山市遺跡分布図	4	第9图	第37号住居跡出土遺物	16
第2图	城ノ越遺跡第15次調査区位置図	7	第10图	第14号掘立柱建物跡	17
第3图	城ノ越遺跡第15次調査区全測図	8	第11图	第8号溝跡	18
第4图	第34号住居跡	10	第12图	土壌	19
第5图	第34号住居跡出土遺物	11	第13图	土壌出土遺物	20
第6图	第35・36号住居跡(1)	12	第14图	集石土壌	21
第7图	第35・36号住居跡(2)・出土遺物	13	第15图	表採遺物	22
第8图	第37号住居跡	15	第16图	城ノ越遺跡第15次調査編年表	23

図版目次

図版1	調査風景	図版3	第34号住居跡出土遺物
	第34号住居跡全景		第35号住居跡出土遺物
	第35号住居跡全景	図版4	第35号住居跡出土遺物
	第35号住居跡カマド		第36号住居跡出土遺物
	第36号住居跡全景		第37号住居跡出土遺物
図版2	第36号住居跡カマド		第82号土壌出土遺物
	第37号住居跡全景	図版5	第82号土壌出土遺物
	第37号住居跡カマド		第83号土壌出土遺物
	第14号掘立柱建物跡全景		表採遺物
	第8号溝・柵列痕		
	第82号土壌		
	第83号土壌		
	第1号集石土壌		

調査の概要

1 発掘調査に至る経過

平成9年2月に早川さと氏より狭山市柏原2332 - 1外の土地における埋蔵文化財の所在について照会があり、それに対して埋蔵文化財包蔵地台帳により城ノ越遺跡に該当することが判明したのでその旨を回答した。その後、埋蔵文化財の確認調査の依頼を受けて、平成9年2月12日から13日にかけて確認調査を実施した結果、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟、集石土壌1基が検出された。この結果について、平成9年2月14日付けで依頼者早川さと氏に報告するとともに、埋蔵文化財発掘調査の実施を指示した。地権者は6月末には工事を開始したいとの意向で、対応が急がれるところであったので、狭山市遺跡調査会が主体となって、平成9年5月28日に発掘調査を開始した。

本調査の文化財保護法第57条第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査届に係る埼玉県教育委員会教育長の指示通知は例言に示したとおりである。

遺跡名	所在地	開発者	調査面積	時代
城ノ越遺跡 (県遺跡番号22 - 013)	狭山市柏原 2332 - 1外	早川さと	520㎡	縄文・奈良・平安

2 発掘調査の組織

1) 発掘調査(平成9年度)

主体者	狭山市遺跡調査会	会長	野村甚三郎	(狭山市教育委員会教育長)	
		理事	斎藤勝治	(狭山市文化財保護審議会委員長)	
		理事	市村春子	(生涯学習部長)	
		理事	吉久隆男	(生涯学習部次長)	
	事務局		事務局長	増嶋長次	(社会教育課長)
			事務局次長	滝口宏輔	(社会教育課長補佐)
			事務局	増田俊夫	(社会教育課文化財係長)
			事務局	小淵良樹	(社会教育課文化財係主査)
調査担当		事務局	原 肇	(社会教育課文化財係主任)	
			石塚和則	(社会教育課文化財係主事)	

2) 報告書作成(平成17年度)

主体者	狭山市遺跡調査会	会長	門倉節明	(狭山市教育委員会教育長)
		理事	今坂隆二	(狭山市文化財保護審議会委員長)
		理事	中内丈夫	(狭山市文化財保護審議会副委員長)
		理事	池原昭治	(狭山市文化財保護審議会委員)
		理事	岸 一身	(狭山市教育委員会生涯学習部長)
事務局	狭山市遺跡調査会	事務局長	仲川和光	(社会教育課長)
		事務局次長	末吉 隆	(社会教育課主幹)

	事務局	石塚和則	(社会教育課主任)
	事務局	田口 勉	(社会教育課主事)
	事務局	安井智幸	(社会教育課主事)
整理担当		安井智幸	(社会教育課主事)

3 発掘調査の経過

発掘調査は、狭山市教育委員会が平成9年2月12日から2月13日にかけて行った埋蔵文化財確認調査の結果を受け、工事予定面積1,266㎡のうち、遺構が確認された520㎡を対象として実施した。調査の経過は、以下のとおりである。

平成9年度

5月28日(水)～5月29日(木)

重機により表土(耕作土)を除去。排土を調査区南西側に積み上げる。

5月30日(金)

機材搬入。休憩用テントの設営。

6月3日(火)～6月4日(水)

作業開始。人力による遺構確認作業。竪穴住居跡4軒、溝1条、焼石土壇1基、ピット多数を確認。

6月5日(木)～6月9日(月)

雨天及び担当者出張のため、現場中止。

6月10日(火)～6月18日(水)

遺構確認終了。調査区西側の第37号住居跡、土壇、ピット群より調査開始。

6月19日(木)

第37号住居跡、土壇、ピット群の個別写真撮影。撮影終了後、実測準備。

6月20日(金)～6月23日(月)

雨天のため現場中止。

6月24日(火)～6月27日(金)

西側遺構群の実測開始。並行して、東側に位置する第34～36号住居跡、第14号掘立柱建物跡の調査を開始。第8号溝の両側に柵列状のピット群を確認。

6月30日(月)

東側遺構群の個別写真撮影。終了後、実測準備。西側遺構群、実測終了。

7月1日(火)～7月15日(火)

東側遺構群の実測、継続。平面図終了後、カマド等の細部調査に入る。7月15日、細部調査終了。

7月16日(水)

機材撤収。現地調査終了。

遺跡の立地と環境

1 地理的環境

狭山市の中央には、外秩父山地の伊豆ヶ岳・武川岳等を水源とする名栗川と青梅市に水源を持つ成木川とが加治丘陵で合流した入間川が流れており、北側となる左岸は二段、南側となる右岸は三段の河岸段丘を形成している。奈良・平安時代の市内遺跡はこの入間川を中心にして分布するものが多い。

入間川左岸は武蔵野台地の一部である入間台地に属し、北から宮ノ越遺跡、城ノ越遺跡、御所の内遺跡、小山ノ上遺跡、鳥ノ上遺跡、富士塚遺跡、森ノ上遺跡と存在し、若干離れて今宿遺跡、上広瀬西久保遺跡、金井上遺跡、宮地遺跡、東八木窯跡等が連続と帯状に続く。これら一連の遺跡群は時代が下るにつれて下流から上流へと形成されていく傾向があるが、主な理由として上流にあたる入間市の東金子窯跡群の成立が挙げられる。

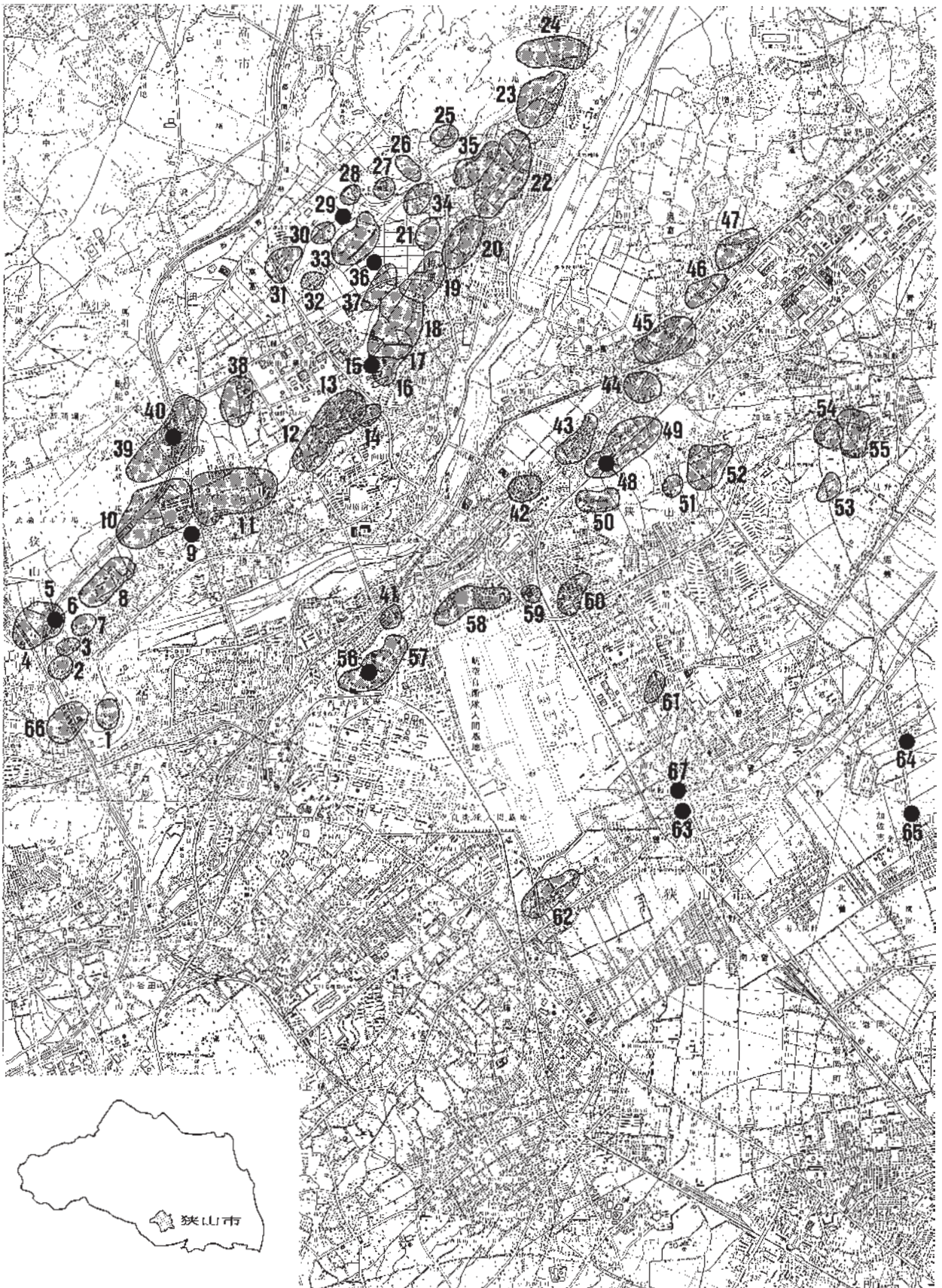
入間川右岸は武蔵野台地に属する旧多摩川の隆起扇状地で、北から稻荷上遺跡、揚榿木遺跡、坂上遺跡、戸張遺跡、峰遺跡、滝祇園遺跡等が左岸の遺跡群に対峙する形で集落を形成する。これら右岸の遺跡群は地下水脈が深く、飲料水の確保が困難であるにも関わらず形成されていることから、入間川の水運の利用が目的であったと考えられる。また、鉄製農具や下総系統の土師器が出土していること、8世紀後半に集中して集落が発展していること等から、移住民も利用した大規模な開墾事業に関連する集落跡であることも考えられる。

2 歴史的環境

先土器時代の遺跡としては、平成2年度から平成3年度にかけて（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団が首都圏中央連絡自動車道建設に伴って実施した西久保遺跡発掘調査において、先土器時代の石器製作跡が多数発見され、当市における該期の一端が明らかとなった。狭山市遺跡調査会でも、平成6年度に同遺跡の発掘調査を行っている。武蔵野台地第4層下部の良好な資料を得た。また、宮地遺跡では細石刃、細石核が表採されている（城近他1972）。

縄文時代の遺跡は、大略草創期から後期後半までが確認されている。概観すると、前期黒浜期に集落の明確化、遺跡数の増加等、大きな動きが認められるが、数的には中期中葉から後葉のものが大勢を占めており、この時期偏差が市内の縄文遺跡を特徴づけている。過去の調査事例もこの時期に集中する。ここでは、今回検出された遺構に関連する中期終末から後期初頭について概述することとする。

市内遺跡は、表面採集資料による時期決定も含めてであるが、縄文時代中期には遺跡数が39箇所と急増し市内遺跡全体の60%を超え、遺跡数の増加、集落規模の拡大が顕著となる。しかしながら、中期終末から後期初頭では、周辺地域にも認められるように集落規模は急速に縮小する。入間川左岸においては、城ノ越遺跡の他、宮地遺跡（8）、字尻遺跡（24）、右岸では揚榿木遺跡（45）等、中期末から後期初頭の柄鏡形住居跡が数軒単位で検出されており、市内各地で集落の縮小、住居軒数の急激な減少が確認されている。柄鏡形住居跡は、周辺の入間市、飯能市、日高市でも多くの検出例があり、県内でも入間地方は本種遺構の分布密度が濃いことで知られている。ただし、本遺跡や字尻遺跡のように該期のみ限定された集落は稀有な存在と言えよう。なお、入間川左岸に立地する今宿遺跡（13）では、中期末の張出部を持たない径3m前後の小型住居跡が確認されている。本種住居跡は、日高市宿東遺跡でも検出例があり、系統や



第1図 狭山市遺跡分布図

狭山市内遺跡一覧（括弧内は県遺跡番号）

- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| 1 東八木窯跡群（22049）奈・平 | 36 下双木遺跡（22078）縄（草） |
| 2 八木遺跡（22068）縄（前・中）奈・平 | 37 上双木遺跡（22077）縄（中・後）奈・平 |
| 3 八木北遺跡（22021）奈・平 | 38 上広瀬西久保遺跡（22073）奈・平 |
| 4 八木上遺跡（22022）縄（前・中）奈・平 | 39 西久保遺跡（22069）先、縄（草）奈・平 |
| 5 沢口上古墳群（22020）古（後） | 40 東久保遺跡（22070）先 |
| 6 笹井古墳群（22019）古（後） | 41 上諏訪遺跡（22086）縄（中・後） |
| 7 沢口遺跡（22080）縄（早～中）古、奈・平 | 42 滝祇園遺跡（22066）縄（草～後）古、奈・平 |
| 8 宮地遺跡（22018）縄（中）奈・平 | 43 峰遺跡（22024）縄（中・後）奈・平 |
| 9 金井遺跡（22071）中 | 44 戸張遺跡（22026）縄（前・中）奈・平 |
| 10 金井上遺跡（22023）縄（草・前）奈・平、中 | 45 楊楯木遺跡（22027）縄（前・中）奈・平 |
| 11 上広瀬上ノ原遺跡（22005）縄（草）奈・平 | 46 坂上遺跡（22029）縄（中）奈・平 |
| 12 霞ヶ丘遺跡（22004）縄（中）奈・平 | 47 稻荷上遺跡（22032）縄（前・中）奈・平 |
| 13 今宿遺跡（22002）縄（早～中）奈・平 | 48 上中原遺跡（22025）先 |
| 14 上広瀬古墳群（22001）古（後） | 49 中原遺跡（22025）縄（早～後）奈・平 |
| 15 森ノ上西遺跡（22079）先 | 50 沢台遺跡（22079）縄（中）奈・平 |
| 16 森ノ上遺跡（22008）縄（中）奈・平 | 51 沢久保遺跡（22041）縄（中） |
| 17 富士塚遺跡（22009）縄（中）奈・平 | 52 下向沢遺跡（22042）縄（中・後）奈・平 |
| 18 鳥ノ上遺跡（22010）奈・平 | 53 吉原遺跡（22067）縄（前） |
| 19 小山ノ上遺跡（22011）縄（中・後）古～中 | 54 下向遺跡（22085）縄（前～後） |
| 20 御所の内遺跡（22012）奈・平 | 55 台遺跡（22084）縄（前～後） |
| 21 英遺跡（22074）奈・平、中 | 56 稻荷山公園古墳群（22052）古（後） |
| 22 城ノ越遺跡（22013）縄（前・中）奈・平、中 | 57 稻荷山公園遺跡（22051）縄（中） |
| 23 宮ノ越遺跡（22016）縄（前・中）奈・平 | 58 石無坂遺跡（22083）縄（中）奈・平 |
| 24 字尻遺跡（22075）縄（前～後）奈・平 | 59 富士見西遺跡（22082）縄（中）奈・平 |
| 25 丸山遺跡（22037）縄（早・前～後）奈・平 | 60 富士見北遺跡（22072）縄（前・中）奈・平 |
| 26 金井林遺跡（22035）縄（前～後） | 61 富士見南遺跡（22081）縄（中） |
| 27 鶴田遺跡（22044）縄（前・中） | 62 町屋道遺跡（22088）縄（前～後）奈・平 |
| 28 上ノ原東遺跡（22065）奈・平 | 63 七曲井（22046）中 |
| 29 上ノ原西遺跡（22063）縄（中） | 64 堀兼之井（22047）中 |
| 30 半貫山遺跡（22061）中 | 65 八軒家の井（22076）中 |
| 31 稻荷山遺跡（22058）縄（後） | 66 八木前遺跡（22087）縄（前・後） |
| 32 前山遺跡（22059）縄（中） | 67 堀難井遺跡（22089）中 |
| 33 高根遺跡（22062）縄（早・中・後） | |
| 34 町久保遺跡（22034）縄（中）奈・平、中 | |
| 35 宮原遺跡（22017）縄（前～後） | |

柄鏡形住居跡との共存関係等、興味深い問題が提起されている。

縄文時代晩期から弥生時代にかけては、当市では確認例が非常に少なく、森ノ上遺跡で土壌中より弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる搬入土器が一点報告されているのみである（安井2005）。

古墳時代の遺跡として当市には沢口上古墳群（5）、笹井古墳群（6）、上広瀬古墳群（14）、稻荷山公園古墳群（56）と滝祇園遺跡（42）が所在する。現在まで調査が実施されたのは笹井古墳群、上広瀬古墳群で、7世紀後半のものと考えられる。笹井古墳群は石室の構造が特異なため、奈良時代以降の墳墓の可能性も否定できない。当該期の集落遺跡としては滝祇園の竪穴住居が挙げられる（小淵他1983）。

奈良・平安時代の集落は入間川左岸に帯状に23遺跡、右岸は久保・不老川流域を含めて14遺跡存在する。これら市内の集落形成の契機となったのは高麗郡の建郡と考えられる。高麗郡は渡来人の高度な技術で未開発地域の開墾を進めようとする中央政府の意図によって東海道・東山道に分散していた渡来人が集められ、霊龜2年（716年）に設置された郡である。

当地方に高麗郡に移住してきた渡来人たちがもたらした技術は主に窯業技術と鉄製品生産技術と考えられており、窯業については東八木窯跡（1）を含む東金子窯跡群の操業開始が、鉄製品生産技術に関しては羽口や鉄滓の出土状況から推定される小鍛冶の開始と在地産鉄製品の普及がその例として挙げられる。8世紀中頃に東金子窯跡群での須恵器生産が開始され、入間川両岸での居住もほぼ同時期に開始されたと考えられる。当該期の遺跡として宮ノ越遺跡（23）、森ノ上遺跡（16）、小山ノ上遺跡（19）、楊楡木遺跡等が挙げられ、東金子古段階である前内出窯古式とそれに並行する南比企産の須恵器が出土している。

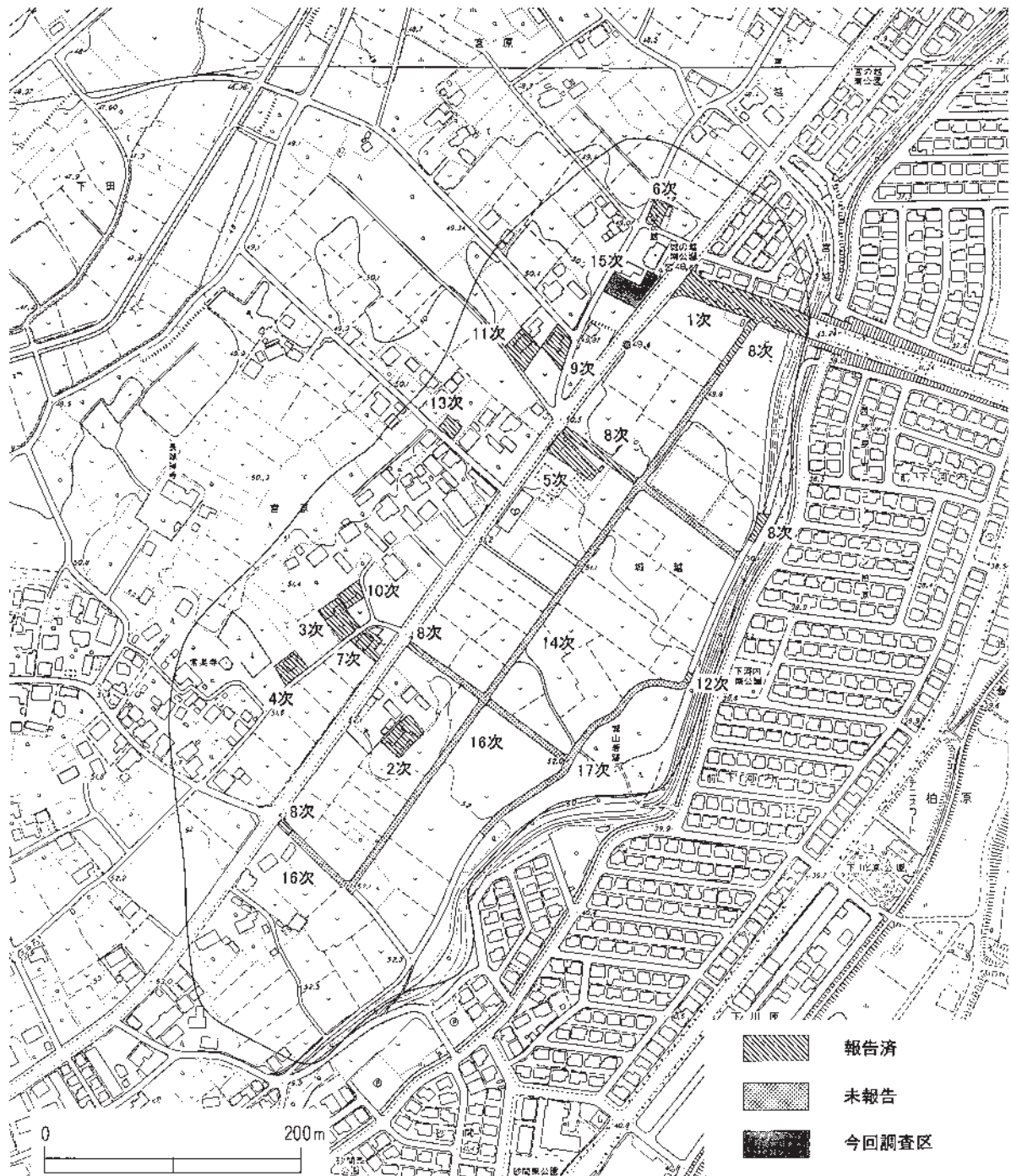
若干時代が下る8世紀後半から9世紀初頭には前内出窯新式の須恵器が普及し、入間川左岸の宮ノ越遺跡、城ノ越遺跡（22）、上広瀬上ノ原遺跡（11）、小山ノ上遺跡、森ノ上遺跡、宮地遺跡では東金子産の須恵器の割合が南比企産を圧倒的に上回る。窯に近くなるほどこの東金子産の割合が大きくなるのだが、右岸の楊楡木遺跡では東金子窯に近いにもかかわらず南比企産の須恵器が出土量遺物の1/3を占める。

9世紀中頃には二つの現象が特徴とされる。一つ目は人口増加で、これは住居跡数から確認できる。入間川左岸では宮ノ越遺跡から城ノ越遺跡、御所の内遺跡（20）、小山ノ上遺跡、上広瀬上ノ原遺跡、霞ヶ丘遺跡（12）、森ノ上遺跡、今宿遺跡、金井上遺跡（10）、宮地遺跡へと連綿と集落が形成されているが、当該期とされる住居跡が圧倒的に多い。右岸でも稻荷上遺跡（47）、楊楡木遺跡、峰遺跡（43）、戸張遺跡（44）、滝祇園遺跡と、左岸ほどではないがやはり帯状に集落が形成されている。二つ目は東金子窯製品が入間川流域一帯の集落に広く供給されるようになったことで、これは出土遺物から確認できる。楊楡木遺跡でも東金子産須恵器が左岸の遺跡と同等の割合を占めるようになる。これら二つの現象の契機として挙げられるが承和12年（845年）に開始された国分寺の再建である。八坂前・新久A-1・2窯（入間市）で瓦焼成が行われたことによる大規模な人資の流入が直接的な要因と考えられる。

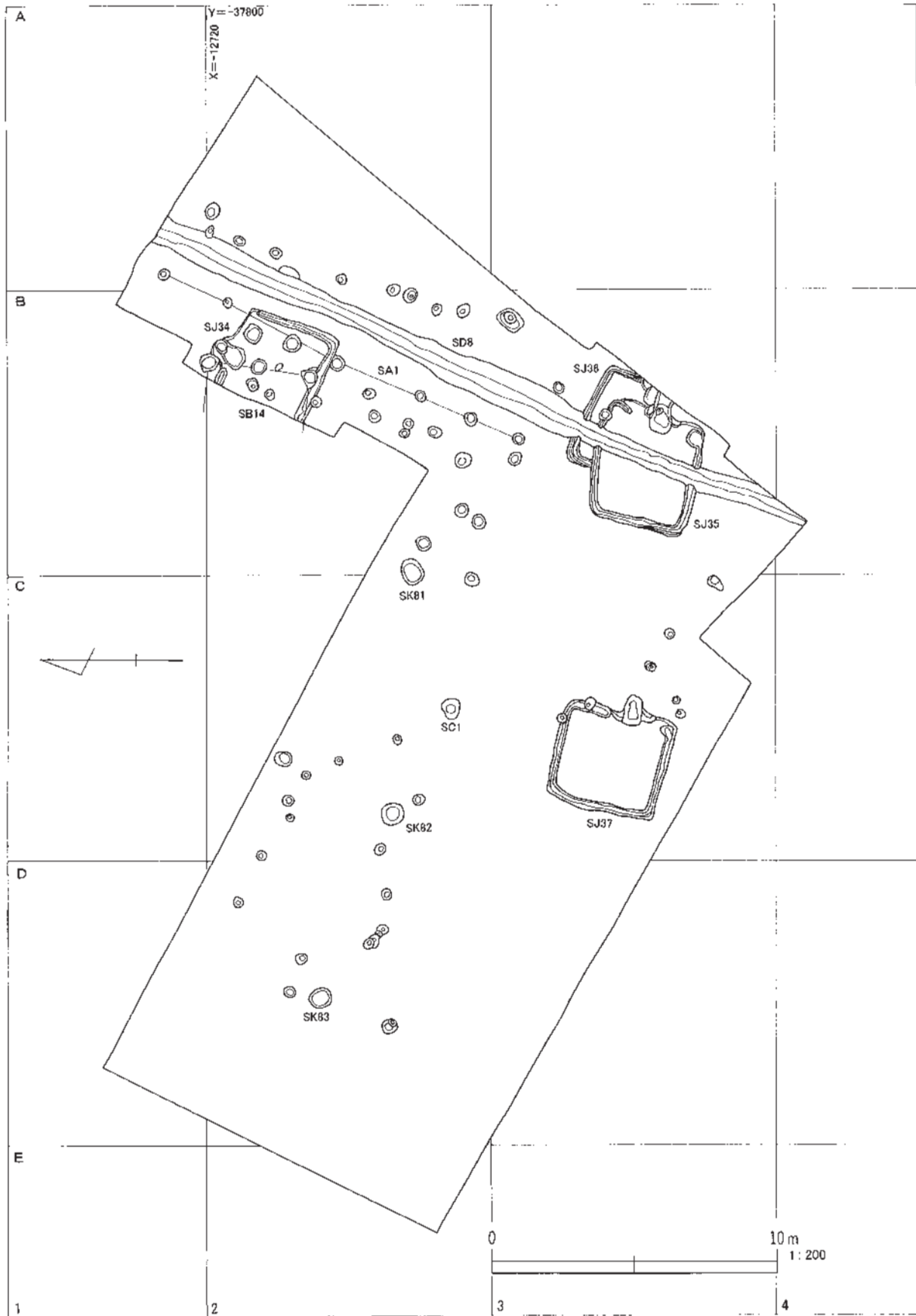
9世紀後半になると住居数は次第に減少し、入間川両岸における住居数や密度の差異はほとんど見られなくなる。当該期の遺跡である宮ノ越遺跡、城ノ越遺跡、小山ノ上遺跡、今宿遺跡、稻荷上遺跡、楊楡木遺跡からは新久A-1・2窯からD-1・3窯の須恵器が出土するが約半数は還元焰焼成が上手く行われていない。土師質須恵器の坏や壺も出現し始めることから須恵器生産の諸環境が悪化し、衰退していることがわかる。須恵器生産の衰退の原因は中央政府の支配力の低下による経済活動の鈍化と治安の悪化が挙げられるが、やはり国分寺再建事業の終了が大きな原因であると考えられる。瓦焼成終了後も須恵器は生産されているが生産規模は縮小されており、操業の終了と共に人口も減少していったものと考えられる。

3 遺跡の概要

城ノ越遺跡は、狭山市柏原字城ノ越に所在する縄文時代前・中期および奈良・平安時代の集落遺跡で、西武新宿線狭山市駅より北へ、直線距離にして3km付近に位置する。遺跡ほぼ中央、南西から北東にかけて県道狭山鯨井線が走る。県道の東側は農業振興区域で、野菜畑や麦畑の田園風景が広がり、西側は市街化調整区域だが、徐々に開発が進み家屋が点在している。分布調査から推定される遺跡範囲は800×350mで、遺跡内の標高は北側が49m、南側が50mで、遺跡面はほぼ平坦といえる。遺跡東側は段丘崖で、下位面との比高差は約12mを測る。



第2図 城ノ越遺跡第15次調査区位置図



第3図 城ノ越遺跡第15次調査区全測図

遺構と遺物

1 調査成果の概要

調査の結果、検出された遺構は竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡1棟、柵列痕1条、溝跡1条、土壇3基、集石土壇1基である。検出された遺物は8世紀第3四半期から9世紀第4四半期までの須恵坏・埴・高台坏・皿・甕・長頸瓶・短頸壺、土師甕・台付甕、滑石製紡錘車である。また、灰釉陶器把手付瓶および長頸瓶も出土した。いずれも胎土・釉の状態から猿投産と推定されるものである。

2 検出遺構と出土遺物

住居跡

第34号住居跡（第4・5図）

B - 2グリッドに位置し、西壁は調査区外になる。第14号掘立柱建物跡、柵列痕と重複する。遺存状態は不良。平面形は正方形を呈し、全体の規模は長軸長4.00m、短軸長3.05m、深さ0.04mを測る。主軸方位はN - 25° - Eを指す。

床面は軟質で平坦、掘り込みが浅く、ほぼ単一層で検出された。住居の中心部に焦土の集中点があり、全体にも炭化物と焼土粒子が散布することから、火災住居の可能性が高い。

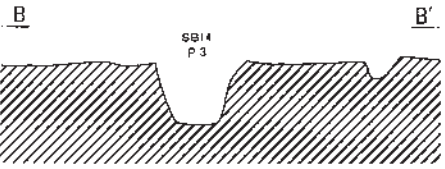
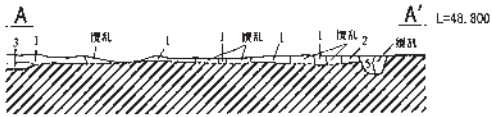
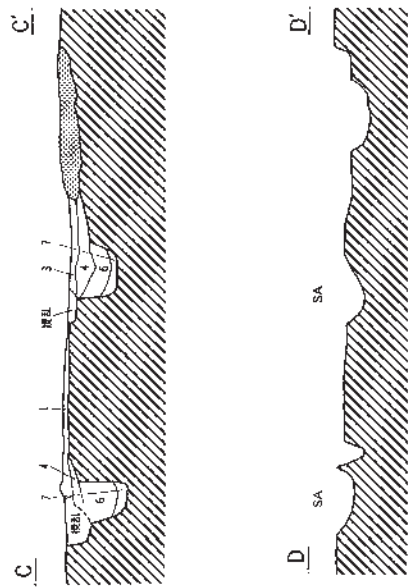
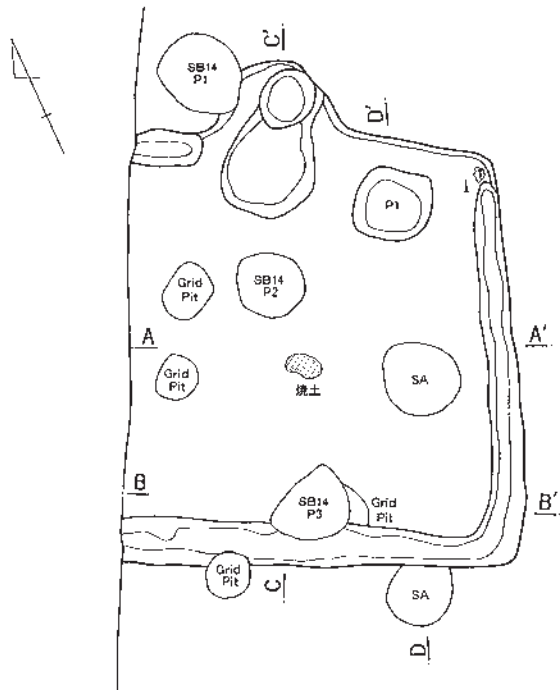
カマドは北壁から検出された。遺存状態は不良、主要構築材である灰白色粘土はほとんど検出されなかった。平面形は瓢箪形を呈し、規模は長軸長119cm、両袖間73cm、深さ18cmを測る。第2層が灰層で、火床面はこの下面にあたる。

ピットは住居北東コーナーに1基検出された。規模は長径70cm、短径62cm、深さ24cmである。壁溝は北東コーナーとカマド周囲を除いて巡る。

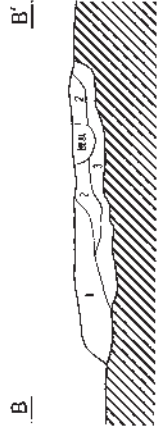
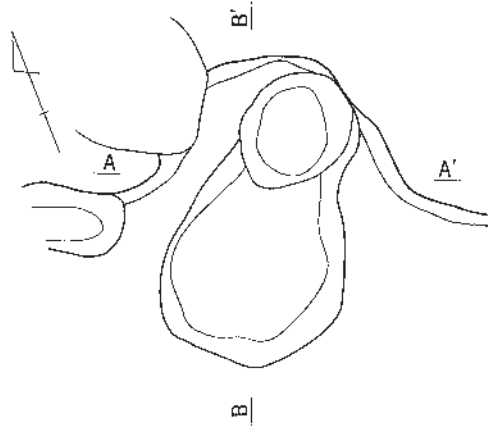
遺物は須恵坏・高台付埴・長頸瓶、滑石製紡錘車が出土している。1は須恵坏である。底部は体部とほぼ同じ厚さで作られ、中心部もほぼ平らである。体部下位はわずかに丸みを帯びるが、腰を持つタイプではない。口縁端部はやや厚手に作られている。内面及び口縁部外面に煤が付着している。住居北東コーナーより出土。2は須恵高台付埴片である。高台はさほど高くなく、貼付された位置は底部と体部の接続点である。底径/口径比は1/2を下回らない。体部はロクロ目が顕著で、わずかに内湾する。内外面のところどころに煤様の黒いシミが確認できる。住居北西部の覆土より出土。3は須恵長頸壺の頸部から口縁部片である。口縁端部の断面は鳥頭状を呈し、大きく外反する。口縁端部中ほどに屈曲を持つ。内外面は降灰を受け、外面は自然釉が確認できる。住居北西部覆土より出土。4は須恵甕片で、頸部径が18.4cmの大型製品である。器厚はほぼ均一で、頸部と肩部の接続点もさほど厚手にはならない。肩部外面に降灰を受けている。体部外面は平行叩き、内面は無文あて具痕が確認できる。住居の貼床下および覆土より出土。5は滑石製紡錘車で完形品。側面に多数の使用痕が確認できる。中心の孔は真円形を呈する。住居北西部の覆土より出土。

第35号住居跡（第6・7図）

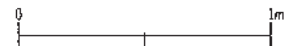
B - 3グリッドに位置する。遺存状態は不良。第36号住居跡と重複し、本住居の方が新しい。平面形は東西に長い長方形を呈し、全体の規模は長軸長4.80m、短軸長3.72m、深さ0.15mを測る。主軸方位はN -



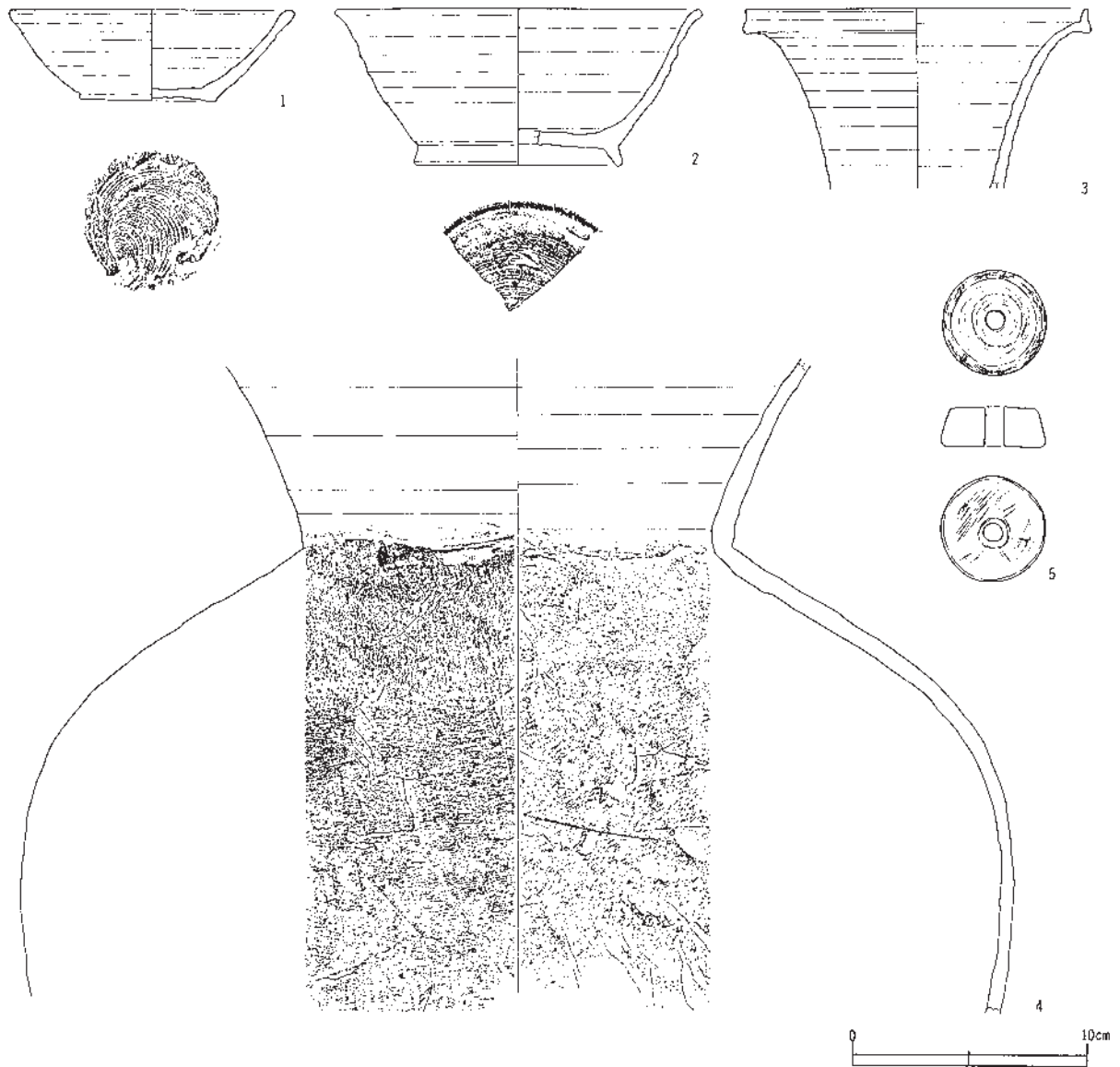
- (S)-34)
- | | |
|--------|------------------------|
| 1 黒褐色土 | ローム粒子・焼土粒子・炭化物混入 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子多量 |
| 3 黒褐色土 | 硬質(粘床)、ローム粒子・ロームブロック多量 |
| 4 暗褐色土 | 硬質(粘床)、ローム粒子・ロームブロック多量 |
| 5 暗褐色土 | ローム主体 |
| 6 黒褐色土 | ローム粒子・ロームブロック多量(粘床) |
| 7 暗褐色土 | ローム主体(粘床) |



- (S)-34カマ F)
- | | |
|--------|------------------|
| 1 黒褐色土 | ローム粒子・焼土粒子・炭化物多量 |
| 2 黒褐色土 | 粘土少量、焼土多量 |
| 3 暗褐色土 | ロームブロック多量 |



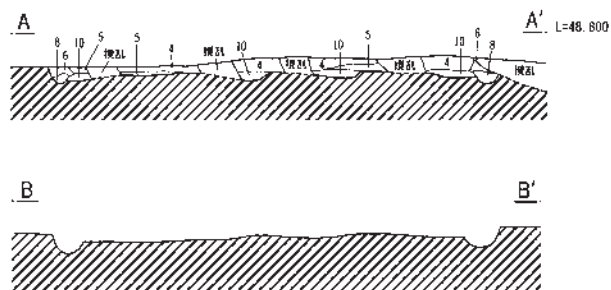
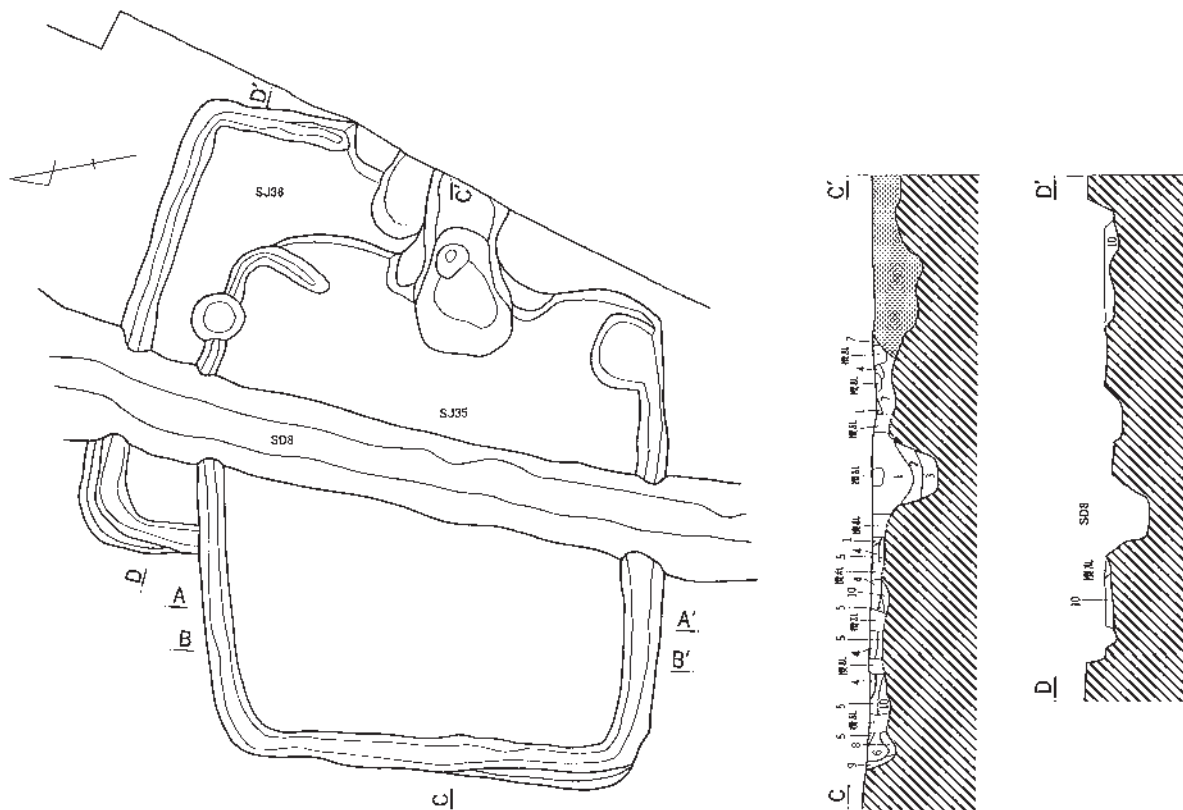
第4図 第34号住居跡



第5図 第34号住居跡出土遺物

第34号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	底径	器高	残存率	胎土	烧成	色調	特徴
1	須恵坏	12.0	5.7	3.9	75%	白色粒子・赤色粒子	不良	灰褐色	回転糸切り。東金子産
2	須恵高台埴	(15.4)	(8.5)	6.7	25%	白色粒子・石英・小礫	良好	灰色	回転糸切り。東金子産
3	須恵甕	-	-	28.0	20%	白色針状・白色粒子	良好	暗灰色	無文あて具痕。平行叩き。南比企産
4	須恵長頸壺	(14.5)	-	7.6	40%	白色粒子・石英	普通	灰褐色	内面降灰。外面自然釉。東金子産
5	紡錘車	直径4.5cm。短径3.6cm。厚さ1.7cm。孔径0.8cm。重さ55g							滑石製



- (SJ-35・36)
- 1 黒色土 焼土粒子・ローム粒子混入
 - 2 黒褐色土 ローム粒子、ロームブロック混入
 - 3 黒褐色土 ロームブロック多量
 - 4 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物多量
 - 5 暗黄褐色土 ローム粒子多量
 - 6 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物多量
 - 7 暗灰色土 粘土粒子多量
 - 8 暗黄褐色土 ローム主体
 - 9 暗黄褐色土 ローム主体、壁の崩落土
 - 10 暗黄褐色土 硬質、黒褐色土混合、ロームブロック多量(貼床)



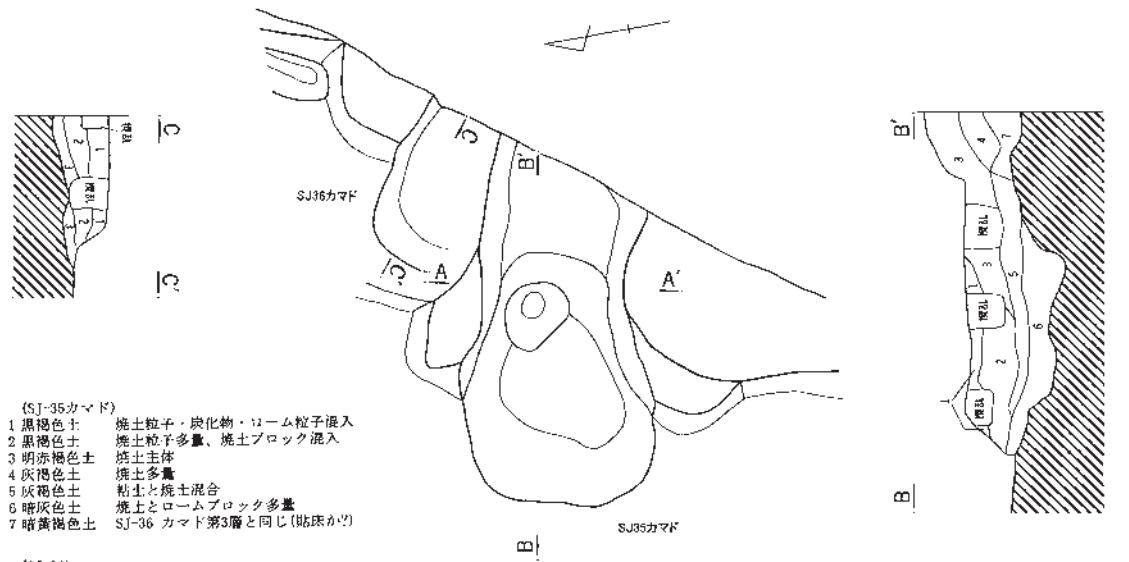
第6図 第35・36号住居跡(1)

第35号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴
1	須恵坏	(14.6)	(5.6)	5.3	45%	白色粒子・赤色粒子	不良	黄灰色	回転系切り。東金子産
2	須恵甕	-	-	-	5%	白色粒子・細砂	良好	灰色	木葉痕。東金子産

第36号住居跡出土遺物観察表

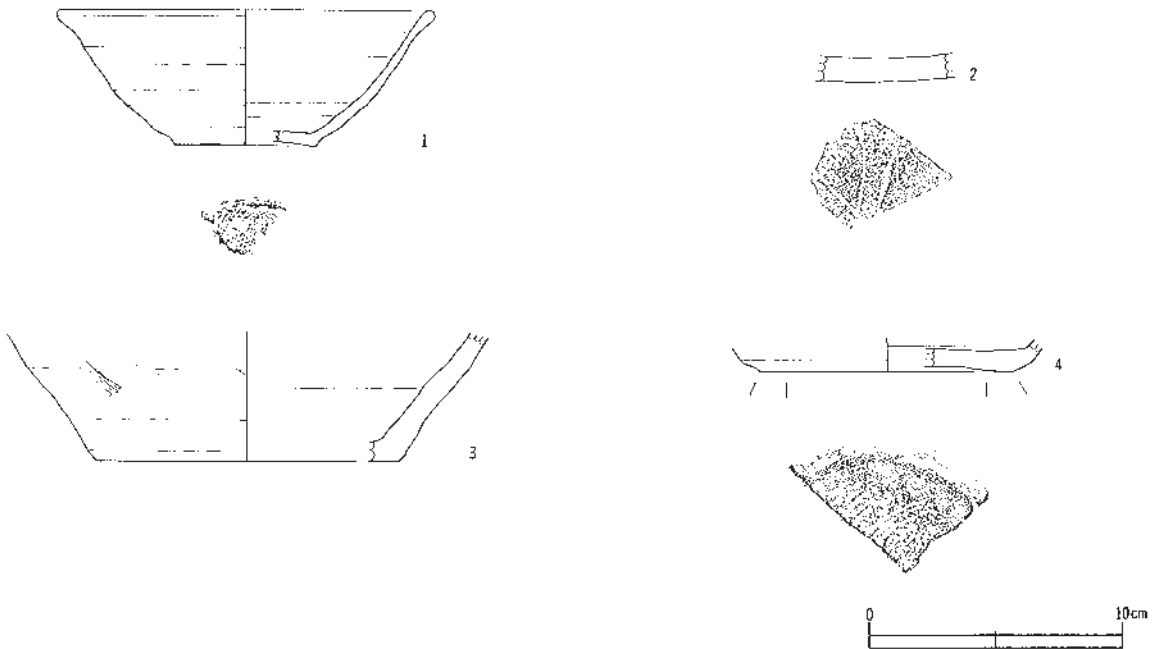
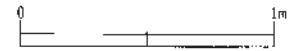
No.	器種	口径	底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴
1	須恵坏	-	(10.0)	1.3	20%	白色針状・白色粒子	不良	淡褐色	回転系切り 周辺手持ちヘラ削り。南比企産
2	須恵甕	-	(11.8)	5.1	15%	白色粒子・石英	良好	灰褐色	平行叩き ナデ。内面自然釉。東金子産



- (SJ-35カマド)
- 1 黒褐色土 焼土粒子・炭化物・ローム粒子混入
 - 2 黒褐色土 焼土粒子多量、焼土ブロック混入
 - 3 明赤褐色土 粘土主体
 - 4 灰褐色土 焼土多量
 - 5 灰褐色土 粘土と焼土混合
 - 6 暗灰色土 焼土とロームブロック多量
 - 7 暗黄褐色土 SJ-36 カマド第3層と同じ(貼床か?)

- (SJ-36)
- (SJ-36カマド)
- 1 黒褐色土 焼土・粘土・ローム粒子混入
 - 2 暗赤褐色土 焼土多量
 - 3 暗黄褐色土 ロームブロック多量

A A' L=48.800



第7図 第35・36号住居跡(2)・出土遺物

83° - Wを指す。

床面は硬質で、貼床がなされている。掘り込みは非常に浅い。第10層は貼床にあたる。

カマドは東壁から検出された。遺存状態はやや不良。平面形は瓢箪形を呈し、全体の規模は長軸長139cm、両袖間53cm、深さ52cmを測る。第5層が主要構築材であった灰白色粘土の溶けた層に当たり、第6層下面が火床面にあたる。

ピットは検出されなかった。壁溝は東壁を除いて巡り、南東コーナーはやや膨らんで、ピット状になるが、詳細は不明である。

遺物は須恵坏・甕が出土している。1は須恵坏片で、器高5.3cmの深型の坏である。口径に比べ、底径が極端に小さく1/2を下回る。体部はやや丸みを帯び、ほぼ均一に薄く作られている。口縁端部はわずかながら厚く作られている。焼成が不良でもろい。住居南東部より出土。2は須恵甕底部片である。木葉痕が明瞭に残る。焼成時に入った亀裂が多く確認できる。器厚から推測すると、中型製品の可能性が高い。住居南東部覆土より出土。

第36号住居跡（第6・7図）

B - 3グリッドに位置する。遺存状態は不良。第35号住居跡と重複し、本住居跡の方が古い。平面形は方形を呈し、南半分が重複のため不明である。全体の規模は長軸長3.70m、残存短軸長2.06m、深さ0.14mを測る。主軸方位はN - 65° - Wを指す。

床面は軟質で、貼床がなされている。第35号住居同様、掘り込みが浅い。第10層は貼床にあたる。

カマドは東壁から検出された。平面形は釣鐘形を呈し、全体の規模は長軸長63cm、残存短軸長40cm、深さ22cmを測る。第1層が主要構築材の灰白色粘土の溶けた層にあたり、灰層である第3層の下面が火床面にあたる。

ピットは検出されなかった。壁溝はカマド周囲を除いて巡る。

遺物は須恵坏・甕が出土している。3は須恵甕体部下位片で、わずかに底部も残る。底部は体部より薄く作られている。底部内面は降灰を受けており、高温で焼成されたため、気泡の混入する自然釉の層が形成されている。体部外面は平行叩き後にナデ調整が施されている。また、体部下端は手持ちヘラ削りによって整えられている。4は須恵坏底部片である。復元底径が10.0cm程の周辺手持ちヘラ削りが施された坏である。外面の調整自体が粗雑であるが、内面の調整は丁寧。内底径が外底径をわずかに上回る。住居覆土より出土。

第37号住居跡（第8・9図）

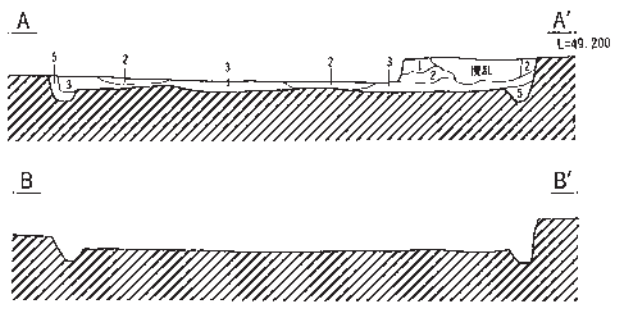
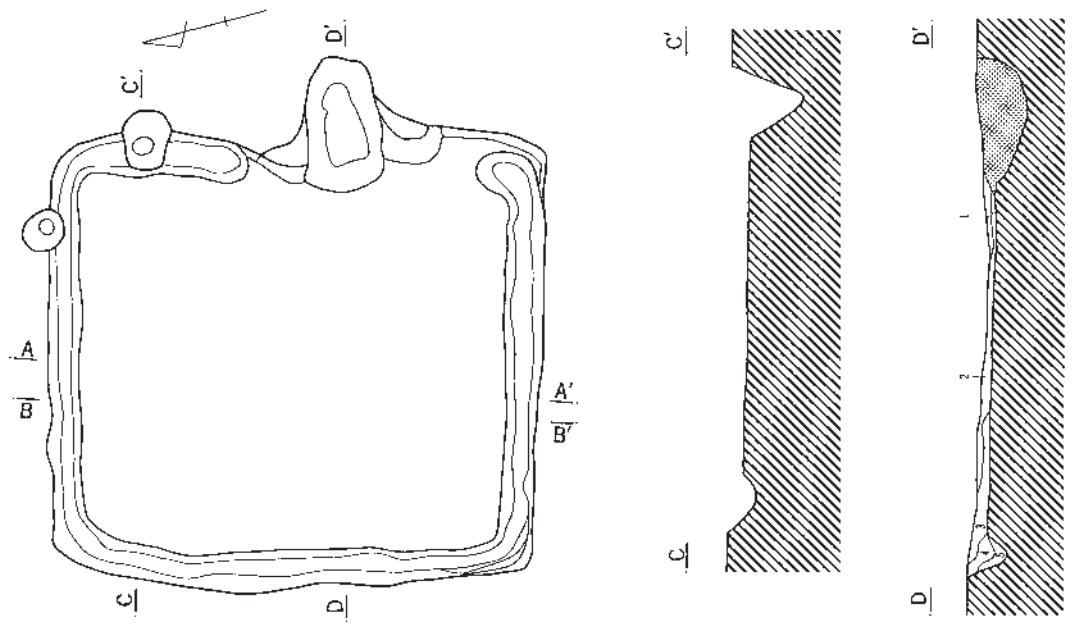
C - 3グリッドに位置する。遺存状態は不良。北壁体は削平されている。平面形は正方形を呈し、全体の規模は長軸長4.20m、短軸長3.88m、深さ0.26mを測る。主軸方位はN - 75° - Wを指す。

床面は軟質で平坦。掘り込みが浅い。

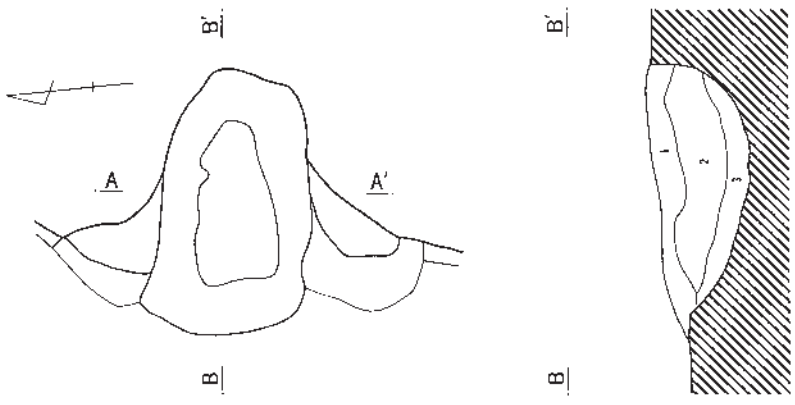
カマドは東壁から検出された。平面形は不整形な釣鐘形を呈し、全体の規模は長軸長106cm、両袖間58cm、深さ40cmを測る。灰層である第3層の下面が火床面にあたる。

ピットは検出されなかった。壁溝はカマド周囲を除いて巡る。

遺物は須恵坏・皿・土師甕・台付甕が出土している。1は須恵坏である。全体的に厚く作られており、特に底部は厚みがある。器高は3.8cmと低い。体部はやや丸みを帯び、外反する口縁部に接続する。砂質の胎土のため、体部下位外面・口縁部内面は使用による磨耗が進んでいる。カマド内覆土より出土。2は

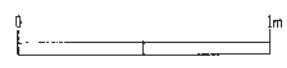
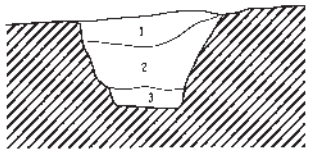


- (SJ-37)
- | | |
|---------|------------------|
| 1 黒褐色土 | ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量 |
| 2 黒褐色土 | 茶褐色土が部分的にブロックで混入 |
| 3 黒褐色土 | ロームブロック多量 |
| 4 茶褐色土 | ローム粒子多量 |
| 5 暗黄褐色土 | ローム主体 |

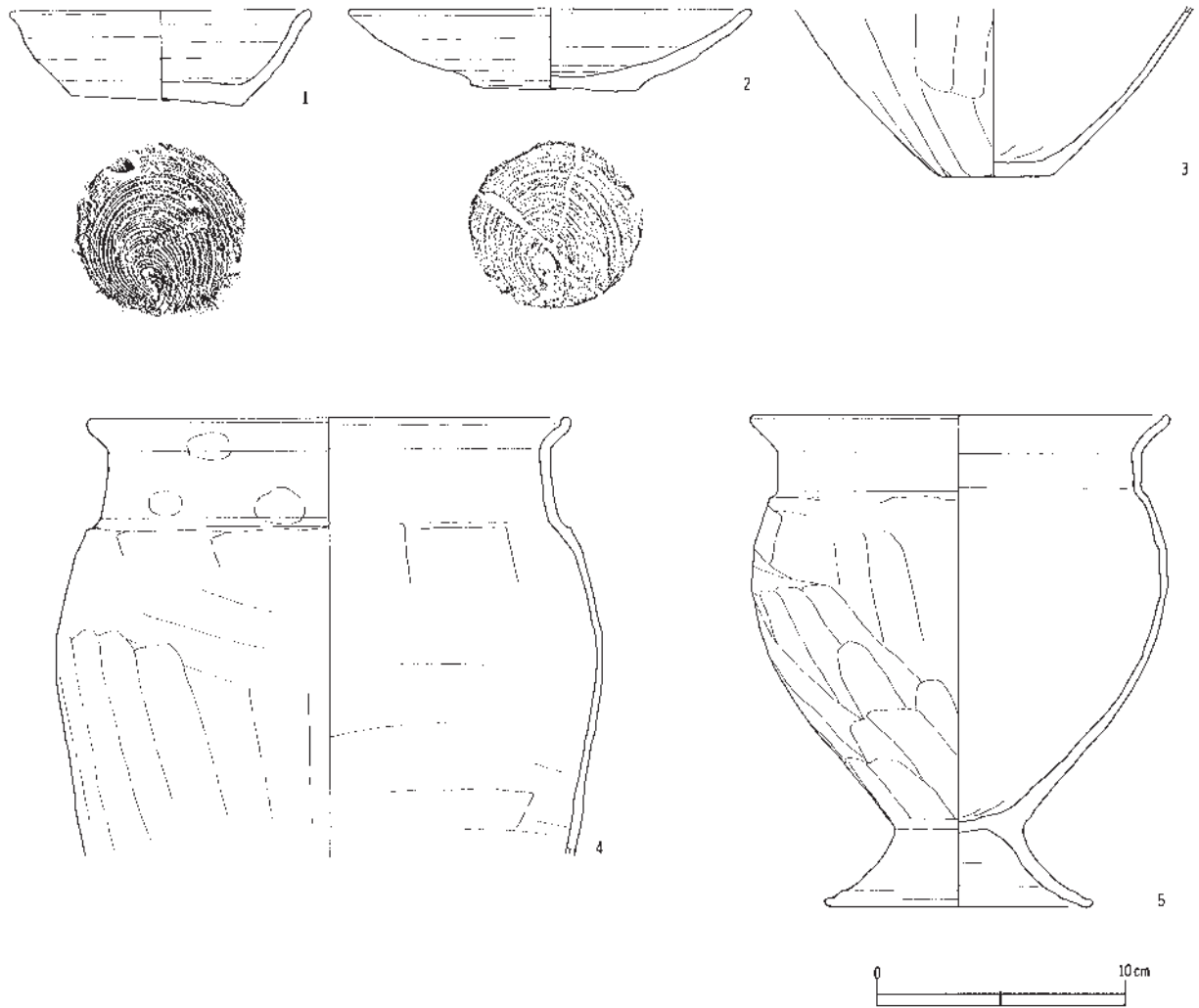


A A'
L=49, 200

- (SJ-37カマド)
- | | |
|---------|--------------------|
| 1 黒褐色土 | 炭化物・焼土多量、ローム粒子混入 |
| 2 暗赤褐色土 | 焼土・粘土混入 |
| 3 黒褐色土 | ロームブロック・黒色土混合、焼土混入 |



第8図 第37号住居跡



第9図 第37号住居跡出土遺物

須恵皿である。全体的に厚く作られており、底部内面から体部内面へは滑らかな曲線を描いて接続している。口縁端部まで素直に伸び、屈曲はしない。台状の底部外面は周辺をヘラ状のもので若干整形した後、ナデ調整をしている。体部内外面のロクロ目は目立たない。各破片の二次焼成進行の差から、破壊後、破片状態で被熱したものと推測される。カマド内覆土より出土。3は土師甕底部片である。底部は平らな面を持ち、体部に比べ厚く作られている特長を持つ。底部内面から体部内面へは滑らかに接続し、体部下位外面よりヘラ削り調整は開始されている。内面は全体的によくナデ調整されている。カマド内覆土より出土。4は土師甕の口縁部から体部にかけての部分である。口縁部は「コ」字状を呈し、指圧痕が点在する。体部は上部で若干膨らむが全体は寸胴である。口縁端部はわずかながらも直立し、内面に不明瞭な沈線を形成する。口縁部から頸部は横ナデが施され、体部上位の横ヘラ削りの後に体部中位以下の縦ヘラ削りが行われている。カマド内覆土より出土。5は土師台付甕で、口縁部は「コ」字状を呈する。細かい破片のため、内面のナデ調整が不鮮明で読み取れない。台部の高さは3.1cmで、口径：台径は16.6：10.5（cm）になり、最大径は口径になることが特徴である。体部の二次焼成がかなり進んでいることが確認できる。カマド内覆土より出土。

第37号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴
1	須恵坏	11.9	6.9	3.8	95%	白色粒子・赤色粒子	不良	淡褐色	回転糸切り。東金子産
2	須恵皿	16.0	6.8	3.3	65%	白色粒子・赤色粒子	不良	淡褐色	回転糸切り。東金子産
3	土師甕	-	4.7	6.8	15%	白色粒子・赤色粒子	良好	明褐色	底部のみ
4	土師甕	(19.0)	-	17.7	20%	白色粒子・赤色粒子	良好	褐色	口縁部「コ」字状
5	土師台付甕	(16.6)	10.5	19.8	30%	白色粒子・赤色粒子	良好	暗褐色	口縁部「コ」字状。口縁部に最大径

掘立柱建物跡

第14号掘立柱建物跡（第10図）

B - 2 グリッドに位置する。東辺の柱穴のみ検出した。第34号住居跡と重複し、これより古いことが土層から確認された。南北の2間のみで詳細は不明。

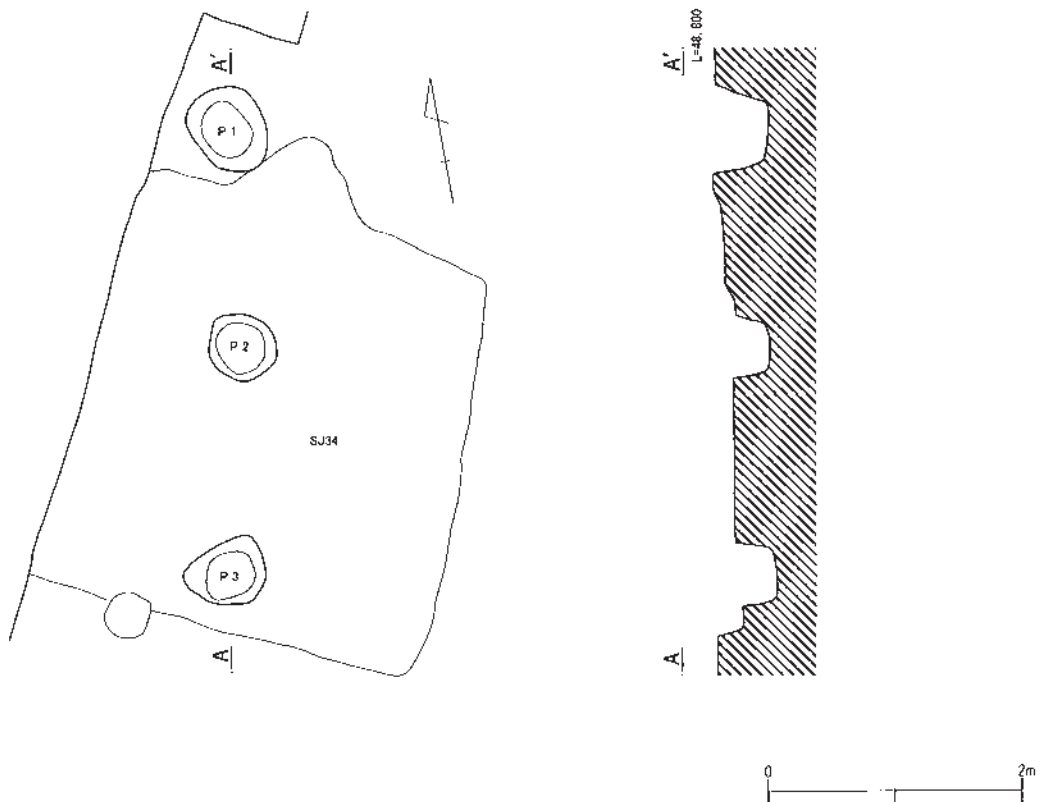
柱間は1.80mを測り、主軸方位はN - 10° - Eを指す。

柱穴は不整形な円形が主体で、規模は径54cm～68cm、深さ40cm～46cmを測る。

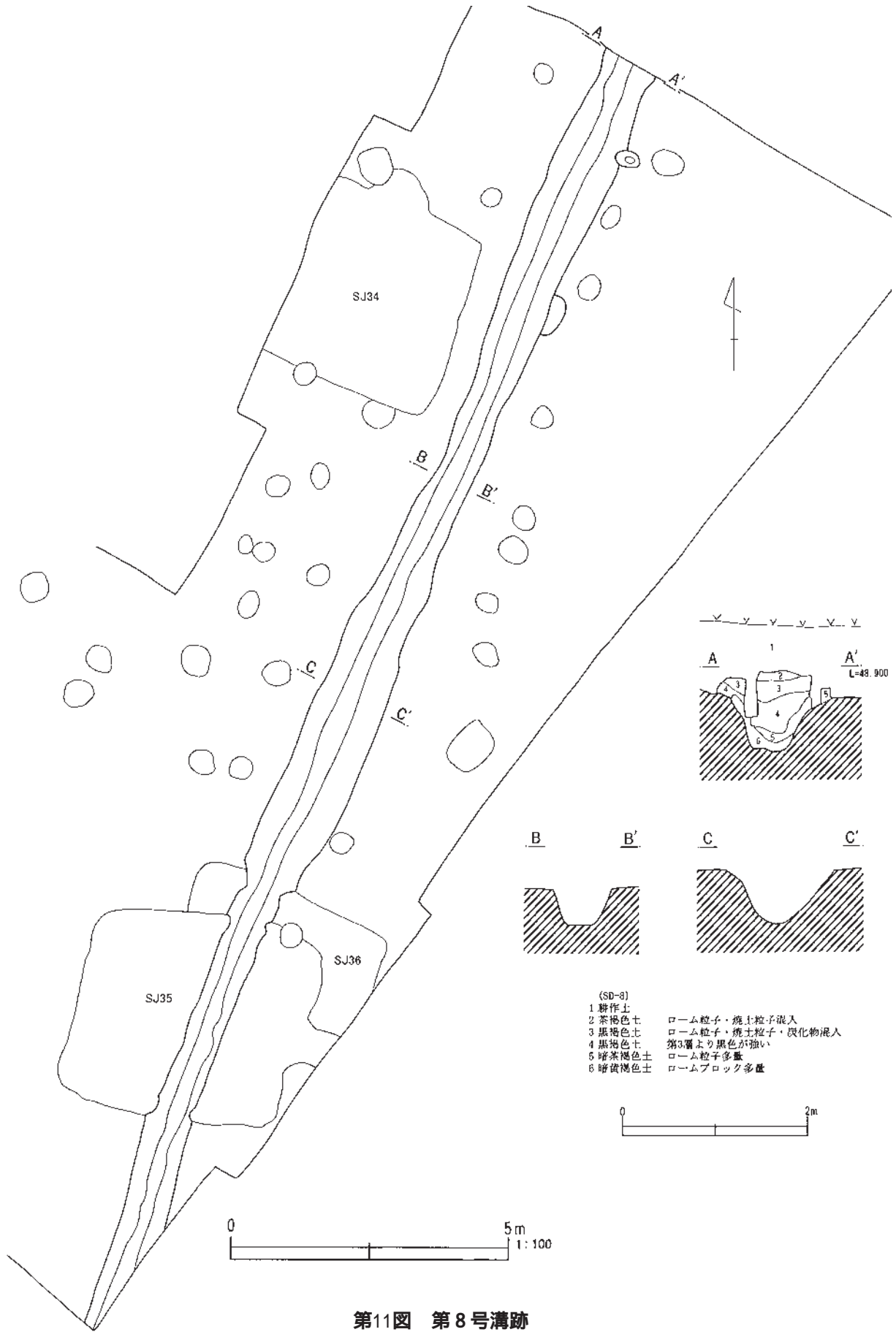
柵列痕

第1号柵列痕（付図）

A - 1 から B - 3 グリッドに及ぶ。第34号住居跡と重複し、これを破壊する。第8号溝と平行して構築されている点と、埋土の様相から、同時期のものと推定される。



第10図 第14号掘立柱建物跡



第11図 第8号溝跡

溝跡

第8号溝跡 (第11図)

A - 1 から B - 4 グリッドに及び、調査区外に延びる。第35・36号住居跡と重複し、これを破壊する。断面形は箱型薬研形を呈し、全体の規模は、溝幅1.50m、深さ0.68mを測る。第1層は耕作土で全ての層を破壊する。2～6層は自然堆積で、埋め戻した形跡は確認されなかった。

土壌

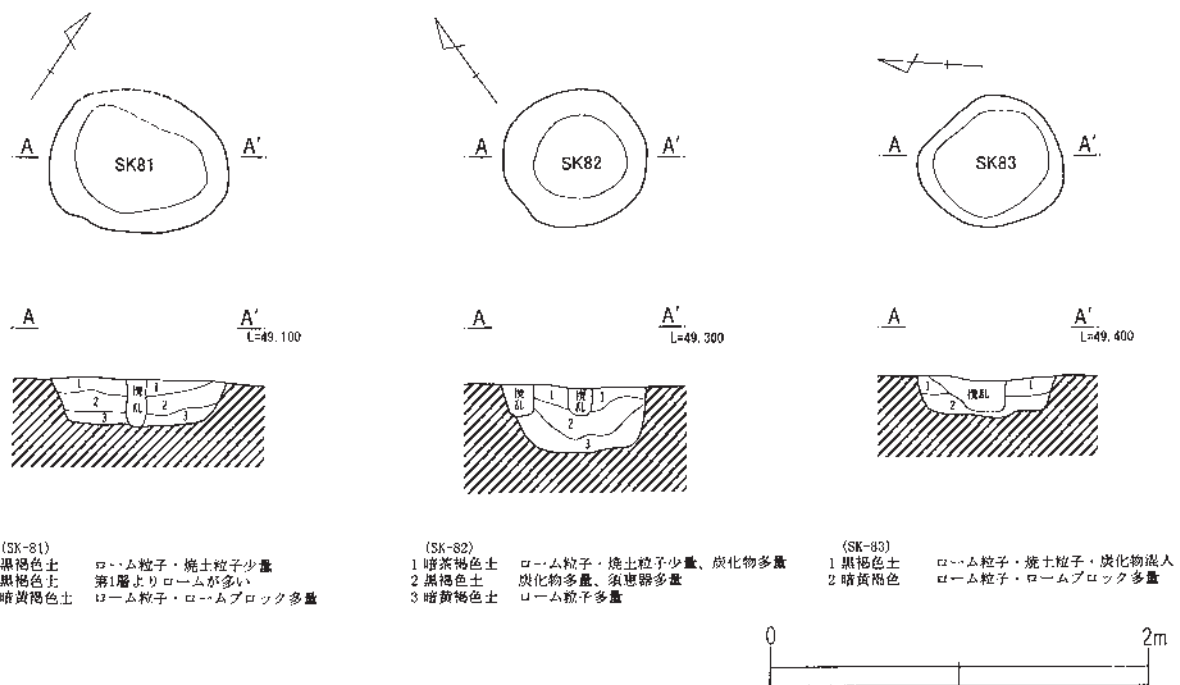
第81号土壌 (第12・13図)

B・C - 2 グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、全体の規模は長軸長0.92m、短軸長0.68m、深さ0.24mを測る。土層から、人為的に埋め戻された形跡が確認された。性格等詳細は不明である。

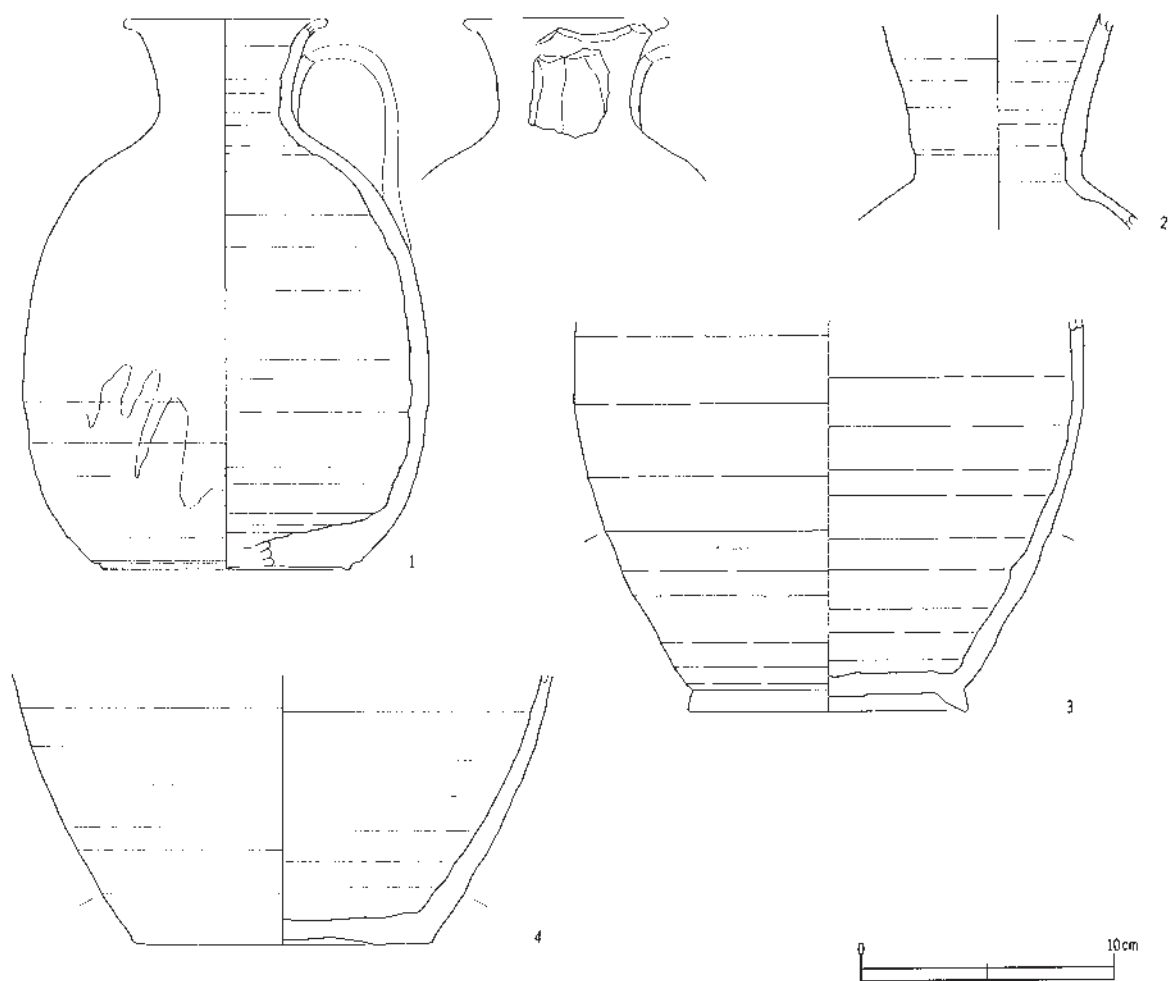
第82号土壌 (第12・13図)

C - 2 グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、全体の規模は長径0.76m、短径0.72m、深さ0.34mを測る。第1層からは炭化物が多く検出されたが、壁体に被熱した形跡は無い。第2層からは多量の須恵器が確認された。人為的な埋め戻しによるものだと考えられる。

遺物は灰釉陶器把手付瓶・須恵長頸瓶・甕が出土している。13図の1は灰釉陶器の把手付瓶である。釉薬の発色は黄緑色。三片は接合しないが、胎土・造作から同一固体と推定される。口縁端部は欠損。頸部に把手の一部が残存する。底部から体部下位にかけて回転ヘラ削り調整が施されている。底部にはわずかながら高台が確認できる。底部内面は外周に近いほど厚く作られている。灰釉の塗られている範囲は、口クロナデの施された頸部からヘラ削り調整をされている体部下位に及ぶ。黒色粒子が目立ち、施釉率も50パーセントを超えることから、猿投産、K - 90号窯式と推定される。3は須恵長頸瓶の底部から体部にかけての破片である。内外面に自然釉が付着しており、内面のもは非人為的に滴下してきたものと推定される。また、底部外面には窯壁および環の口縁部が付着している。底部と体部の接続部分のナデ痕が顕著



第12図 土壌



第13図 土壌出土遺物

第82号土壌出土遺物観察表

No.	器種	口径	底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴
1	灰釉把手付瓶	(7.8)	9.7	21.5	25%	黒色粒子・細砂	良好	灰白色	黄緑色灰釉。猿投産
3	須恵長頸瓶	-	10.8	15.4	30%	白色粒子・石英・細砂	良好	灰色	内面自然釉。東金子産
4	須恵甕	-	11.8	10.7	35%	白色粒子・石英・細砂	良好	灰色	内外面自然釉。内面降灰。東金子産

第83号土壌出土遺物観察表

No.	器種	口径	底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴
2	須恵長頸瓶	-	-	8.4	35%	白色粒子・石英	良好	暗灰色	内外面自然釉。東金子産

に残る。4は須恵甕底部片である。底部内面は降灰を受け、外面はヘラによる整形・調整が施されている。体部外面は自然釉が付着している。

第83号土壌（第12・13図）

D - 2 グリッドに位置する。平面形は歪んだ円形を呈し、全体の規模は長軸長0.78m、短軸長0.70m、深さ0.18mを測る。土層から、人為的に埋め戻された形跡が確認された。性格等詳細は不明である。

遺物は須恵長頸瓶が出土している。2は須恵長頸瓶の頸部片である。頸部の厚さは9mmを測るが、肩部の厚さは4mmとかなり薄い。頸部と肩部との接続点と若干上方に太くなる部分に輪積み痕があるため、壺状の器に短頸状の口縁部を付け、さらに頸部を付けたものと考えられる。内外面に自然釉が付着しているが、外面の釉は特に厚く層を形成する。

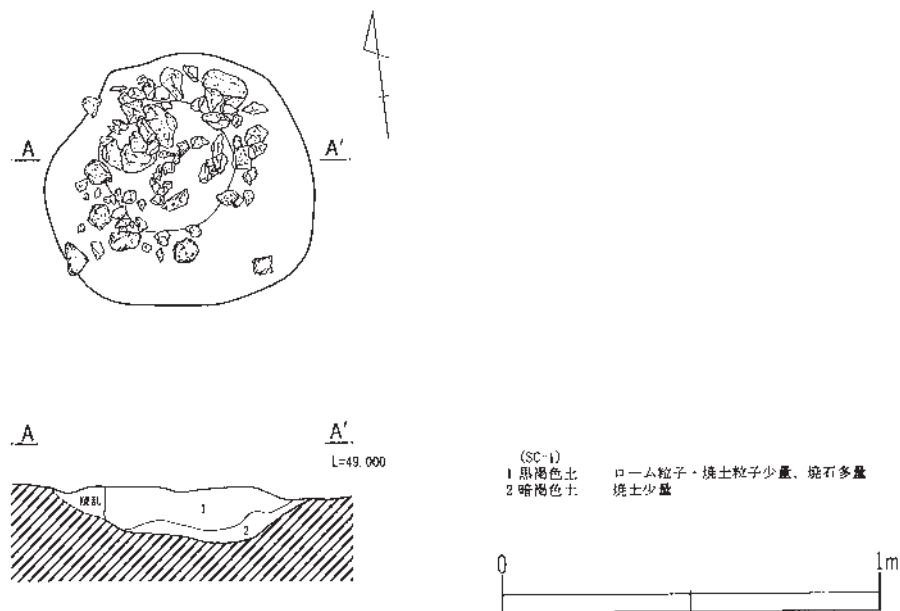
集石土壌

第1号集石土壌（第14図）

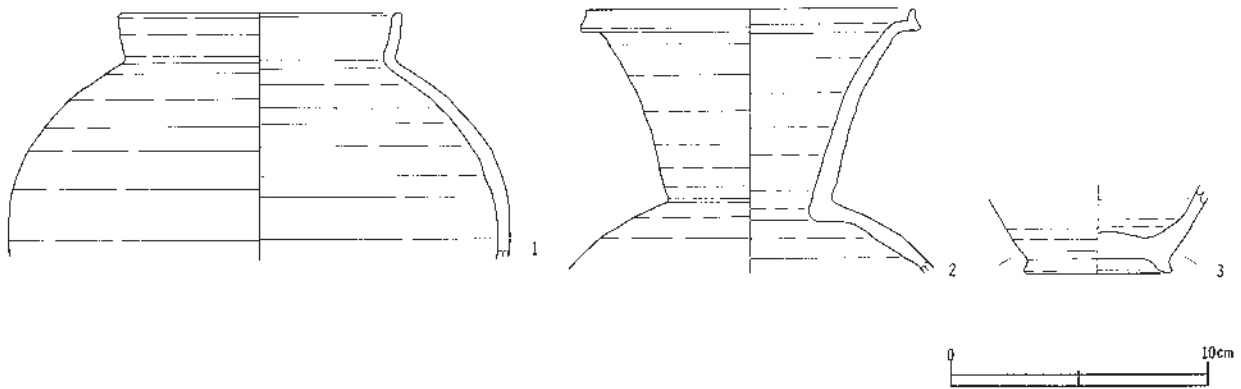
C - 2 グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は鍋底状を呈する。全体の規模は長径0.68m、短径0.66m、深さ0.14mを測る。埋土の第1層は被熱した破碎石が多量に出土した。第2層は被熱し、剥離した壁体と推測される。

表採遺物（第15図）

1は須恵短頸壺の口縁部から肩部の破片である。ロクロナデ整形が口縁部から肩部まで施されている。口縁部断面はほぼ中心で屈曲し、「く」字状を呈する。最大径は肩部下位と推定される。口縁端部は内面に面を形成する。内面には黒色のペースト状発泡が数箇所確認できる。2は須恵長頸瓶口縁部から頸部の破片である。朝顔形を呈し、口縁端部の外反がやや大きく、断面形は鳥頭状を呈する。3は灰釉長頸瓶の底部片である。若干「八」字状に開く高台を有する。外面の一部にハケで塗られた灰釉が確認できる。底部は体部と比較すると厚手に作られており、底部外面は平坦、底部内面はゆるい「W」字状に中心が盛り上がる。内面には棒状のものによる調整痕と降灰が確認できる。また、体部下位外面はヘラ削り調整が、貼付高台内側には指圧痕が確認できる。丁寧な調整が施された高台部とハケ塗り施釉の技術から猿投産と推定した。



第14図 集石土壌



第15図 表採遺物

表採遺物観察表

No.	器種	口径	底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴
1	須恵短頸壺	11.0	-	9.7	20%	石英・白色粒子・細砂	良好	暗灰色	外面降灰。東金子産
2	須恵長頸瓶	13.0	-	10.4	45%	石英・白色粒子・細砂	良好	暗灰色	口縁部内外面降灰。東金子産
3	灰釉長頸瓶	-	5.5	3.5	40%	石英・細砂	良好	灰色	底部下位ヘラ削り。猿投産

まとめ

今回報告する遺構はいずれも出土遺物が少なく判断は難しいところだが、既報告の遺構群とほぼ同時期の9世紀代が中心のものであると考えられる。編年表は小山ノ上遺跡（中村 1998）、森ノ上遺跡（安井 2005）の編年表に沿う形で作成した。

各遺構の出土遺物から、第34号住居跡は 期（9世紀第3四半期）、第35号住居跡は 期（9世紀第4四半期後半）、第36号住居跡は 期（8世紀第3四半期後半）、第37号住居跡は 期（9世紀第2四半期）、第82号土壌は 期（9世紀第3四半期）に比定した。

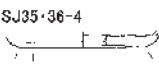

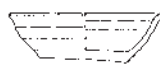
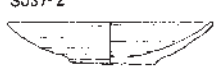
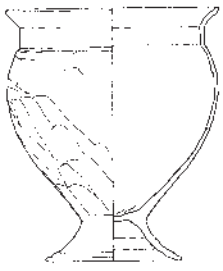
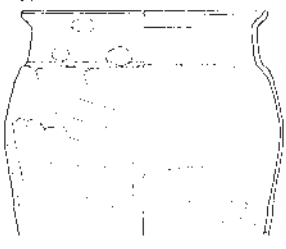
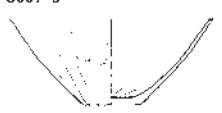
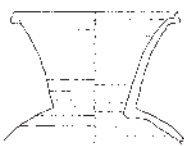





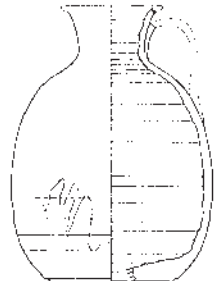

第36号住居跡は須恵坏の底部が周辺手持ちヘラ削りであること、焼成は不良ではあるが底径が9.8cmの大型の南比企産のものであることから 期とした。

第37号住居跡は坏が底径/口径比が1/2より大きく器高も3.8cmと 期の様相を呈するが、皿の口縁端部が外反しない点、土師甕の口縁部が「コ」字状の崩れかけのものなどの特徴から、 期とした。

第34号住居跡の高台付坏は、9世紀第3四半期とされる宮ノ越遺跡の第4号住居跡出土の高台付坏と器形、口径：底径比、高台貼付位置が近似することと、須恵坏が新久D-3窯製品と考えられることから、 期と考えた。

第82号土壌は第34号住居跡と同一個体である須恵甕が出土していること、灰釉把手付瓶が猿投のK-90窯式と考えられることから 期とした。

第35号住居跡は、深型坏の器形と、口径/底径比が宮ノ越第21号住居跡のものと同様特徴を示すので、 期に続く 期のものとした。

I 期	南比企産	東金子産	土師器
II 期	SJ35・36-4 	SJ35・36-3 	
III 期			
IV 期		SJ37-1  SJ37-2  SJ37-5 	SJ37-4  SJ37-3 
V 期	表探-2  SJ34-1  SJ34-2 	SJ34-3  SK82-3 	灰釉陶器 表探-3  SK82-1 
VI 期		SJ35・36-1 	

第16図 城ノ越遺跡第15次調査編年表

参考文献

- 石塚和則 2001 『城ノ越遺跡第7次・8次調査』 狭山市埋蔵文化財調査報告第23集
- 石塚和則 1997 『城ノ越遺跡第9～11次調査』 狭山市埋蔵文化財調査報告第20集
- 石塚和則 2000 『宮ノ越遺跡第8次・城ノ越遺跡第12・13次調査』 狭山市埋蔵文化財調査報告第21集
- 今井正美他 1986 『狭山市埋蔵文化財調査報告書4 楊櫃木遺跡』 狭山市文化財報告第12集
- 書上元博・金子直行 1996 『八木上ノ八木ノ八木前ノ上広瀬北ノ森坂北ノ森坂』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第165集
- 金子直行 2002 『八木崎遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第281集
- 小淵良樹他 1987 『狭山市埋蔵文化財調査報告書5 今宿遺跡』 狭山市文化財報告第12集
- 駒見和夫他 1982 『宮ノ越遺跡』 埼玉県遺跡調査会報告第44集
- 酒井清治 2002 『古代関東の須恵器と瓦』 同成社
- 坂詰秀一 1984 『八坂前窯跡』 八坂前窯跡調査会・人間市教育委員会
- 坂詰秀一 1971 『考古学調査報告 武蔵新久窯跡』 雄山閣出版
- 高橋一夫他 1974 『前内出窯址発掘調査報告書』 埼玉県遺跡調査会報告第24集
- 富田和夫 2002 『熊野遺跡(A・C・D区)』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第279集
- 中平 薫 2002 『常木久保・稻荷・神明』 日高市埋蔵文化財調査報告書第31集
- 中村倉司 1988 『小山ノ上遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第70集
- 仲山英樹他 1985 『狭山市埋蔵文化財調査報告書 城ノ越遺跡2・3次』 狭山市文化財報告
- 仲山英樹 1988 『古代集落遺跡出土の墨書土器』 『古代集落の諸問題』 玉口時雄先生古稀記念事業会
- 増田正博 1978 『城ノ越遺跡』 城ノ越遺跡調査会
- 安井智幸 2005 『森ノ上遺跡』 狭山市遺跡調査会報告書第14集
- 渡辺 一他 1988 『鳩山窯跡群』 鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会
- 渡辺 一他 1990 『鳩山窯跡群』 鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会

写真図版



調査風景



第34号住居跡全景



第35号住居跡全景



第35号住居跡カマド



第36号住居跡全景



第36号住居跡カマド



第37号住居跡全景



第37号住居跡カマド



第14号掘立柱建物跡全景



第8号溝跡・柵列痕



第82号土壇



第83号土壇



第1号集石土壇

图版一3



第34号住居跡 (第5图 - 1)



第34号住居跡 (第5图 - 2)



第34号住居跡 (第5图 - 3)



第34号住居跡 (第5图 - 4)



第34号住居跡 (第5图 - 5)



第34号住居跡 (第5图 - 5)



第35号住居跡 (第7图 - 1)



第35号住居跡 (第7图 - 2)



第36号住居跡(第7图-3)



第36号住居跡(第7图-4)



第37号住居跡(第9图-1)



第37号住居跡(第9图-2)



第37号住居跡(第9图-3)



第37号住居跡(第9图-4)



第37号住居跡(第9图-5)



第82号土壤(第13图-1)

图版-5



第82号土壤 (第13图 - 1)



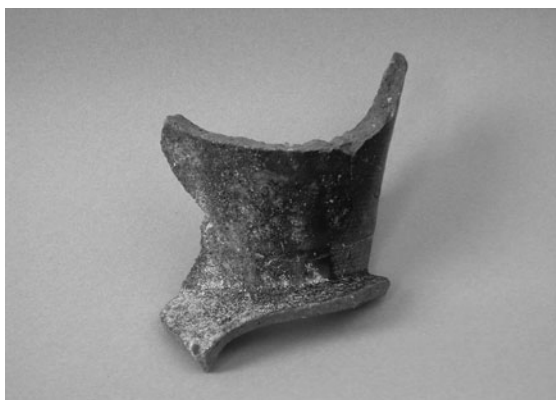
第82号土壤 (第13图 - 1)



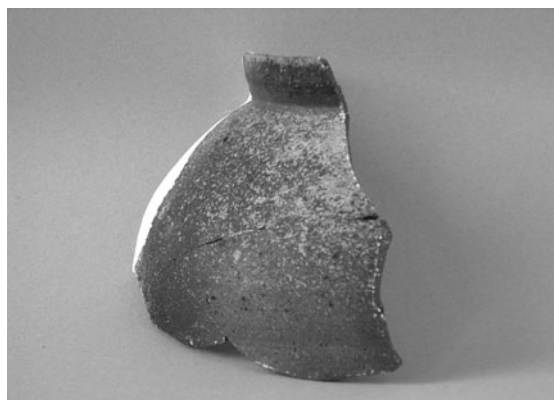
第82号土壤 (第13图 - 3)



第82号土壤 (第13图 - 4)



第83号土壤 (第13图 - 2)



表探遺物 (第15图 - 1)



表探遺物 (第15图 - 2)



表探遺物 (第15图 - 3)

報告書抄録

ふりがな	しろのこし いせき だい15じ ちょうさ							
書名	城ノ越遺跡 第15次調査							
副書名	ガソリンスタンド建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	埼玉県狭山市遺跡調査会報告書							
シリーズ番号	第15集							
著者氏名	安井智幸							
編集機関	埼玉県狭山市遺跡調査会							
所在地	〒350 - 1380 埼玉県狭山市入間川1 - 23 - 5 TEL 04 - 2953 - 1111							
発行年月日	西暦2005(平成17)年7月21日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	°			
しろのこし いせき 城ノ越遺跡	さいたまけん さやまし 埼玉県狭山市 かしわばら ばん 柏原2332番 - 9外	22	13	35 °52 58	139 °24 49	19970528 ~ 19970716	520	ガソリン スタンド建設 に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
城ノ越遺跡	集落跡	縄文時代 奈良・ 平安時代	集石土壌 1基 竪穴住居跡 4軒 掘立柱建物跡 1棟 柵列痕 1条 土壌 3基 溝跡 1条		須恵器 灰釉陶器 土師器 石製品	灰釉陶器把手付瓶		

狭山市遺跡調査会報告書 第15集

城ノ越遺跡
第15次調査

ガソリンスタンド建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成17年7月11日 印刷
平成17年7月21日 発行

発行 埼玉県狭山市遺跡調査会
埼玉県狭山市入間川1丁目23番5号
04 - 2953 - 1111

印刷 巧和工芸印刷株式会社

【正誤表】

城ノ越遺跡 第15次調査

(狭山市遺跡調査会報告書 第15集)

ページ	行	誤	正
5ページ	11 上広瀬上ノ原遺跡	22005	22007
	48 上中原遺跡	22025	22039
	49 中原遺跡	22025	22038